

ある手紙

どれほどに時代を経ても、変わらないことはある。百年前も、二百年前も、子供は大人になりながら異性に心を惹かれてきたし、大人はその未熟な者達の行動を監視してきた。二十世紀も終わりを告げようとする現代でも、その法則は大多数の青少年に当てはまるといつていい。

だが一方で、こいキングランドのボーディングスクールでは、多少の例外は昔から存在した。本来つがいとなるべきペアを探し始める年齢に片方の性のみが密集しているのだから、多少法則にそぐわない事は起こり得る。ボーディング・スクールで過ごすようになって四年目のカミュ・ルーファス・バロウもまたそのような例外の一人で、彼自身、己がいかにこの点で基準から外れているかを自覚していた。

いずれ、標準のセオリーなど当てはまらぬのだから、彼が幼少の頃から何時の日かただ一人の女性を得る日のためにとコツコツ積み重ねてきた知識（含・年上の兄からの押し売り&年下のませた弟の体験談）など何一つ役に立ちほししない。甘いバレエのシーンから見様見真似のフレンチ・キスをやらかしてしまつたカミュは、当初の興奮が去ると軽く自己嫌悪に陥つた。いきなりあんな事をして、やつぱり、まさかつたのじやないだろうか。

彼が想いを寄せる相手は、同じ学年で去年まで同室だつた、

ミロ・アーヴィング・フェアファックスだ。ヴァイオリンを弾く事にかけては光る才能を持つが、それも含めて彼の全人格はどんな意味でも標準とはほど遠い。ミロがフレンチ・キスなど知らなかつたことはカミュはとうに理解していたが、十七歳とはとても思えない純真さで何の躊躇もなく好意を露にする彼に、あのキスの意味が果たして理解出来たのか、逆に気味悪がられたのではないか、と不安になつたのだ。

しかし、その不安は翌日の昼、もつとも有り得ない形で杞憂となつたのである。

「よし、メシ食いにいくか」

カミュが日曜の礼拝から戻ると（カミュは教会聖歌隊に所属している）、今年二人部屋の同室を分けるアイオリア・ジャスティン・エインズワースがそう声をかけてきた。

アイオリアは所謂 *Batty Bird*、朝型の人間だ。日曜もさつさと午前七時には起きて買い置きのリアルのミルク掛けを流し込み、日課になつてきているジョギングに出かけていく。育ち盛りの青年の常で、正午の一時間前にはもう腹の虫の大合唱が始まる。

カミュはもう少し遅くに起きるが、礼拝があるので通常朝食をとらずに出かけ、十一時すぎに部屋に戻る。どのみち、日曜は寮でも二食は出す、朝十時頃からブランチ（といつてもトーストと卵くらいしかないが）、それから夕方に軽食が出るくら

いだ。しかし、そんなものでも無いよりはましで、あまり遅く行くとそれすらもなくなってしまうので、アイオリアは同室のカミュの帰りをいつもじりじり待っている。

日曜ともなれば、アイオリアの正反対の人間も居て、大抵は昼近くまで眠っている。そんな一人の部屋を、アイオリアが訪ねよう、と言った。

「ミロの奴、まだ寝てるんじゃないか。あいつまた昼飯食いつぱぐれるぞ」

ウィーク・デーに今年から転科したヴァイオリンのレッスンをぎちぎちに詰め込み、かつAレベルテストでもそこそこの成績を狙っているミロのスケジュールはまさに殺人的と呼ぶに相応しい状況だ。そういうわけで、ミロは週末にその足りない睡眠時間を補充している。しかし、その結果幾度か昼食の時間に間に合わず、夕食の時間までひもじい腹を抱える羽目に陥っていた。

カミュは、昨日の今日でミロと顔を合わせるのはかなり気恥ずかしかつたが、それは勿論この気の良いルームメイトの知らぬ事、下手に意識しない方がよいと心を決めて、アイオリアと共にミロの部屋に向かった。そして、案の定まだベッドの仲で微睡んでいたミロをアイオリアが些か乱暴に起こすのを、ドアの外で微笑しながら眺めていた。内心、ミロは自分を見てどんな反応を返すだろうか、熱が醒めて少し距離を取ろうとするか、それとも自分だけ分かるような甘い視線を送ってくれるだろうか、と、胸をざわめかせながら。

と、その時だった。

アイオリアの扱いに不満たらただったミロが、カミュの姿をみとめ、ぱちりと目を開けてこう言ったのだ。

「あ、おはよう、カミュ！」

ぱあつと光が差したような笑顔にカミュがほつとしたのもつかの間、ミロは裸足十畳間着のまま廊下まで出て来て、カミュの顔に普通の友人では有り得ない距離で自分の顔を寄せた——つまるところ、人通りもある廊下のと真ん中で、「ちゅつ」とそれなりに大きな音を立てて、マウス・トウ・マウスのキスをしたのだ。

カミュの背筋が石化し、一瞬意識が肉体を離れたのは言うまでもない。

そして、その浮遊した精神で、カミュは今この現場を目撃してしまつた人間の数を数えた……こちらに挨拶しに近寄ってきたウォルトとアンソニー、逆側突き当たりマックス、その手前に部屋から出て来たマイケルとウィリアム、それから階段の向こうの下級生……そして、今、丁度、ミスター・ベネットが階段を上がってきたところだ！ 何故、こんなタイミンで……！！

「な……何やつてんだ、ミロ!!!」

アイオリアのひっくり返つた怒号がミス寮の長い廊下に反響し、カミュ・パロウのもつとも普通でない日常が幕を開けた。

「だから、好きなものを禁止する権利なんて、誰にもないって言ってるんだ！」

スミス寮のハウスマスター部屋。

細長い寮に建て増したようにくっついているその部屋の応接室では、その日一日中ミロ・フェアファックスの抗議とハウスマスターのベネット氏の厳しい押収が繰り返られていた。このスミス寮の舎監になって十余年、これまで数百人の生徒達をつつがなく社会に送り出してきたベネット氏は、思いがけずミロがカミュにキスをした現場を目撃してその問題の深刻性をみとめ、そのままミロをハウスマスター部屋に引つ張つてきたのだ。

つい数日前に、この二人は深刻な喧嘩をして、カミュが数時間行方不明になる事件があった。ミロの報告では、カミュは当初雨の中湖に向けて走つていったという。普段冷静なカミュが雨の中濡れたまま帰らないとはただいことではない。そして、それからまだ一週間も経つていないというのに、ミロは再びカミュに対し問題行動を起こしたのだ。

色々な意味で手のかかるミロ・フェアファックスのコントロールを、面倒見のよいカミュ・パロウに押し付けてきた、との自覚のあるベネット氏は、ミロのいきすぎた行動が、カミュと科が分かれ、ミロがその事に寂しさを感じた故の甘えと理解した。そして、いい加減カミュをミロのお守りから解放しなくてはならないとの使命感に駆られ、ミロを自室に呼び多少厳し

い口調で事の次第を訊ねたのだ。その結果、先の言葉とともに、ミロから猛反発を食らったのである。

「そういう問題じゃない、フェアファックス。君はボーディングスクールで、集団生活をしている身なんだ。しかも君はもう六年生、下級生の模範となるべき身だ。もう少し周囲への影響を考えたまえ！」

「なにがそういう問題じゃないんだ！人を好きになることは素晴らしいことだつて、先生もいつも言ってるじゃないか！」

俺は本気でカミュが好きだ。でも、そう思つてるだけじゃ、カミュに伝わらない。そもそも、俺とカミュのことに、なんで先生や周りの人間が口を挟むんだ？ たかが、人を一人好きになるだけのことじゃないか……！」

「フェアファックス……！だから、学内での恋愛は禁止されていると言つただろう！君は、折角必死で頑張つて音楽の専科に行つたのに、退学になりたいのか？」

「そんなのおかしい！音楽科では、誰もカミュを好きになることがいけない事だなんて言つてない！むしろ、恋愛は表現の助けになるつて先生も言つてる！」

「この学校の大半は普通科の学生だ！彼等には、恋愛は勉強の邪魔になりこそすれ、殆どの場合助けにはならない！第一、君は本当にパロウが好きなのか？つい数ヶ月前には、彼に對する怒りをむき出しにしていたじゃないか！彼が君を裏切つたという理由で……私から見れば、君はただパロウに甘えているだけだ。科が別れて、彼が君の世話を焼かなくなつた

ので、駄々をこねているんだ。彼にも、大切な試験が待ち受けている。いい加減、彼に面倒をかけるのは止めなさい！」

「面倒なんかかけてないし、俺は本気でカミュが好きだって言っているじゃないか！　これは、俺とカミュの問題だ！　カミュが嫌だというなら止める。だけど、先生や、他の誰にも、このことについて指図はさせない！」

「……というわけだ。四時間かけて説得したが、残念ながら、フェアアックスにはまったく反省の色が見られない。」

その数時間後、カミュはハウス・マスターの呼び出しを受けて、つい一週間前にも訪れた部屋の中央で身の縮む思いをしていた。どうせ呼び出しを食らうなら、何故自分を先に呼んでもらえなかつたか、とは言つても詮無いことだが、自分より先に呼ばれたミロが状況を更に悪化させたことは、ミスター・ベネットの顔色を見れば一目瞭然であった。

「今週の火曜日に、君たちは君の転科試験の件について随分深刻な言い争いをしたな。君もこの部屋で報告してくれた通り、その件はそれで片付いたと思つていたんだが……。今回のこと、君はどう受け止めている？　あのとき、君も特に反抗はしなかつたようだが」

カミュはごくりと唾を飲み込み、慎重に言葉を選んだ。

「……いえ……。その、僕も、あまりに突然の事だったので、咄嗟に反応が出来ませんでした」

内心はともかく、表面上は落ち着いて見えるカミュの様子に、ベネットはほつとしたような溜息をつき、言葉を吐き出した。

「先にも言つた通り、フェアアックスは、君の事が好きなので、それを君に伝えるために今朝の行動に及んだのだと主張している。つまり、友人としてではなく、非常に特別な好意を抱いている、ということらしい。君も知つての通り、学内に於ける恋愛は重度の校則違反、場合によっては退学勧告も有り得る。この規範はもともと上級生による下級生への性的いじめを阻止するためのもので、君達には当てはまらないが……。だからといって、彼のような開けつびろげな行動が許される場所ではないことは、君には分かつて貰えるものと思つ」

「はい……」

ミロよりはかなり世間一般の常識に通じている、と自負のあるカミュは、ハウスマスターとしては至極最もな忠告にそれ以上何も言えずに頷垂れた。

「正直、私は君のような生徒に対しては、慎重にならざるを得ないんだよ。フェアアックスは、まったく隠し事の出来ない性格だから、ある意味安心出来る。だが、君は、辛い事も嫌なことも、全部自分の内側に隠してしまう傾向があるからね。もしフェアアックスにあのような好意を向けられることに、わずかでも違和感や嫌悪感を感じるなら、今ここで言つて欲しい。場合によつては、フェアアックスを別の寮に移すという方法もある。——だがもう一つ、私には別の懸念もある。私のような立場の者が、嫌が応にも考えなければならぬ一つの可能性

として聞いて欲しいんだが……それは、君が、彼の好意を受け入れた場合だ」

ベネットは、そこで、多少言いにくそうに言葉を切った。カミュの健全かつ健康的な情緒の発達を疑うわけではないが、彼にしてみれば、この大人しく争い事を好まない生徒が、ミロの暴挙に対し何も出来なかつたという事実そのものが警鐘を鳴らすものだった。カミュは多少嫌なことがあつても、自分が我慢することでその場を取めてしまう傾向がある。自分が嫌なことを主張するためには、喧嘩も流血沙汰も辞さないミロとは対照的であり、この二人の利害が衝突したときに、譲るのは百パーセントカミュの方であろうと容易に想像がついたからだ。

「私としては、その可能性も阻止しなくてはならない。それは、フェアファックスの主張するような個人の権利の蹂躪ではなくて、それがこのボーディングスクールという形態を維持していくために必要な規範だからだ。……実は、君があつたとき抵抗しなかつたことが、少し気にかかつている。君が、フェアファックスのことを、とても大切な友人だと思つてゐることは知つてゐるよ。その友情に痺を入れたくないがあまりに、君がミロ・フェアファックスの少々行き過ぎた行動を許し、それが恋愛感情に発展しかねないことを怖れている。憶測で言つてゐるんじゃない。こういった学校では、しばしば起こることだからだ」

カミュは、喉の奥に言葉が詰まつたのを感じた。ベネットは勘違いをしている。友情の一線を越えた関係を迫つたのは自分の方であり、ミロは多少自分に執着があつたとしても、自分の

ように体の熱を持て余しているとは思えない。それを言わずにミロの所為にするのは、ミロに対する明白な裏切りだ。

しかしそう言つてしまつたら、自分達は一体どうなつてしまふのだろうか？ 自分はともかく、ミロは今年から奨学金を得てゐる。運良く放校にはならなくとも、ミロの転寮、奨学金取り消しくらいは十分に有り得ることだ。

二年上の先輩達があれほどの騒ぎを起こしても、ハウスマスター以下教官には知られなかつたというのに、自分達はなんと立ち回りが下手なのだろう、とカミュは頭を抱えたい気分になつた。

「……いえ。ミロのことは、とても大切な友人だと思つていますが、それ以上の感情はありません。今朝のことは、本当にあまりに驚いたので、咄嗟に何も出来なかつただけです。……次に似たようなことが起こつたら、ちゃんと言うつもりです。そういうのは困る、と」

こは、なんとしてもしらを切り通さねばならない、とカミュは覚悟を決めた。もともと、自分達の間には、法律でも許されてゐないのだ。このような閉鎖的な場所、大つびらにできる筈がない。

「そうか……それなら良かった」

ベネットは、ほつとしたように大きく息を吐き、それから漸く笑みをみせて言つた。

「君がそう言ひなら、問題はそれほど難しくはない。……私も、出来ればこの件に関しては穏便に済ませたいと思つてゐる。

……残念ながらフェアファックスには反省の色がないが、今後君の意思を無視して今朝のような行動に及ぶようなら、彼を他の寮に転属させるつもりだ。彼も今は専科生だし、寮が変われば自然と距離も置けるだろう」

その態度は、人類に連綿と受け継がれてきた習慣——年長者が年端のゆかぬ未成年の恋愛を厳しく監視する姿そのものであり、そこにはどんな例外も割り込む隙はないのだと、カミュは悟った。

最悪の一步手前と言うべきか。ただでさえ料が変わつて授業で会うことも減つているのに、寮まで変わつてしまつたら、食事の時間や休憩時間にも会えなくなつてしまふ。足掛け四年、ミロへの好意に気付いた時には既にふられ、それでも想い続け、懸命にミロに尽くし、痛い対価も支払つて漸く手にいれた幸福だというのに、何故初日からこんな険しい路に迷い込んでしまつたのだろうか？

しかし、起きてしまつたことを嘆いても仕方がない。カミュは忙しく次の対処を計算した。

ミロと自分が恋仲になつたことは、絶対に学校側には知られてはならない。ミロを他の寮に転寮させられないためにも、彼の奨学金を守るためにも。

もうひとつは、友人達をどうするかだ。アイオリアやウォルト、アンソニー達は、味方になつてくれるだろうか？ 実はこちらの方がよほどデリケートな問題だ。特に、リアは去年まで自分やミロと同室で、自分達のことを良い友人だと思つてくれ

ている。それがいきなり付き合つている、などと言おうものなら、友情に罅が入りかねない。また、アンソニーは同性の恋愛について、生理的な不快感を抱いているのは既に確證済みだ。こちらも、生半可なことでは納得しないだろう。

カミュは一通り現状を再確認して、今後の方針について答えを出した。すなわち、自分達の恋愛は、当分互誰にも分からぬよう、当人達の胸に秘めておくべきだ、と結論したのだ。問題は、それをいつミロに話し、納得させられるかだが、ハウスマスターの説得にも応じなかつたミロがそう簡単にこのことを飲んでくれるとは到底思えず、そんな話をゆつくりできる機会も、そうそうは巡つてこなかつた。

大変不本意なことだが、それまでは、ミロに冷たく当たらざるを得ない。カミュは、その結論に胸を押し潰されるような痛みを感じた。一度想い通じ合つたと思つた人間に、理由もわからず冷たくされたら、どれほどミロは傷つくだろうか？

そこで、カミュは思い出したのだ。このとんでもなく常識から外れた恋愛と、その騒動に、一抹の希望を与えてくれるかもしれない手段——「手紙」という古代から伝わる意思伝達の方法を。

ミロ・フェアファックスが自分の部屋に戻つてきたとき、部屋の扉は何故か閉まつていた。普通、こういったボーディングスクールの二人部屋では皆極力ドアを閉めない。理由は勿論、

仲間へんに勘ぐられたくないからである。

部屋を出る時に閉めた覚えはないし、同室のポールもこの時間はない。不審に思ったミロがために扉をノックすると、ドアがいきなり前触れもなくがぼつと開き、ノブに手をかけていたミロの体は、たたらを踏んで部屋の中に転がり込んだ。

「話がある」

頭上に振つて来た厳しい声に、ミロは顔を上げた。アイオリア、マックス、ウォルト、アンソニーの四人が、輪になつて自分を見下ろしていた。

「ミロ、今朝、お前がカミュにしたことだが……あれは、一体なんだ？」

ウォルトが単刀直入にそう訊いて来たので、ミロは、またそのことか、と眉を蹙めた。それについては、散々ハウスマスターとバトルを繰り返したばかりで、もううんざりだったからだ。「なんだ、つて……勿論、朝のキスだよ。それに対する文句だつたら、帰つてくれ。これは、俺とカミュの問題だ」

「朝のキス、つて……」

マックスは片手を額に当てて天を仰ぎ、アンソニーはがつくりと頷垂れ、ウォルトの眉間の皺はますます深くなつた。

「ミロ、そういうわけにはいかないだろう。カミュはお前だけのものじゃない。俺達の大切な友達でもあるんだ。一体どういうつもりだ？ ふざけてるのか？」

「ふざけてる？ まさかー！」

ミロはかつとなり、ウォルトに詰め寄つた。

「ふざけてあんなことなんかするもんか！」

「じゃあ、一体どういうつもりなんだ？」

「そりゃ、カミュが好きだからに決まつてるだろう！」

「お前なつ！」

そのとき、遂に椅子を蹴り倒してアイオリアが立ち上がり、ミロの胸倉を掴んだ。アンソニーとマックスが慌てて後を追ひ、二人の肩にそれぞれ手をかけた。この二人は、今学期始まつた直後にも、掴み合いの喧嘩をしている。これ以上の面倒ごとは、断固阻止せねばならない。

「自分が何したのか、本当に分かつてんのか？ あんな、下級生もいるような人前でカミュにキスなんかしやがつて！ お前は『好きだから』で済むかも知れないが、カミュの事を考えてみるつ！ アイツが一昨年のダンス大会の後、ゲイだの女装趣味だの、散々無責任な噂立てられてどんなに傷ついたか、お前だつて見てたんじやないのかつ!!」

ミロはアイオリアの剣幕に驚いて黙り込み、アイオリアはミロを突き放すようにして解放した。

「お前が脊髄反射で生きてるのは知つてるが、ちつたあ脳味噌使つてカミュの気持ちも考えろ！」

「まあ、リアも少し落ちて着けよ」

ウォルトが割り込み、アイオリアとミロを椅子に着かせてから言った。

「俺自身は常にもリベラルでありたいと思つし、そういう事に対して偏見もないつもりだ。……でも、もう少し、カミュの立場

とか、周囲の目とか、バランスを考えないとまずいんじゃないか？ 下級生にも噂が広まっちゃまって、ハウスマスターには見られるし……はつきりいって、俺がカミュの立場だったら滅茶苦茶困つてると思うぜ？ 過度のスキンシップや、執拗な行動は、性的なイジメだぞ」

「カミュもさ、なんていうの？ ついお前の気持ちとか考えてズバツと言えないだと思っただよ、あの性格じゃさ。でも、それで図にのつたらヤバイだろ？」

ウオルトに続いて、マックスがガリガリと頭をかきながら「まずそうに言った。」

「イジメって……ウオルト、俺、そんなつもりで……」

「だったら、今週の火曜の夕方、何があつたんだよ？ お前とカミュの間で。本当の事言ってみろよ。専科に行くのを止めただの、連絡をくれないなかつただの、そんな話でカミュが湖に向かって飛び出すくらい動転するか？」

アイオリアが問答無用といった態度でぎりぎりミロを睨めつけ、ミロはその日自分の対応のまずさを隠して仲間と夜の雨の中カミュを探してもらつた後ろめたさを思い起こして、俯いた。「……それは……俺が、カミュにキスしたから……それで訳が分らなくなつて……言つてたけど」

今度こそ、ミロ以外のその場の全員が硬直した。

今日が初めてじゃなかつたのか。それでもつて、カミュは、そのミロの暴挙を彼にしか持ち得ないの心の広さで許したのか？！

アイオリアはわなわたと握り拳を震わせ、きつかり三秒後に大音声の雷をミロの頭上に炸裂させた。

「貴様……あの騒動は、てめえの破廉恥な行動が原因か!! てめえはもう俺の部屋には立ち入り禁止だ。今後一切カミュと二人きりなんかになろうとするな！」

日曜夕方の食堂は、平日より人が少なかつたが、カミュと親しい友人の顔は全て揃つていた。カミュの隣にアイオリアとアンソニー、その前に、遅れてやつてきたウオルト、マックスとハウ。ハウの向こうはウイリアムとマイケルが、ひとことも会話を交わさないうまま向かい合つている。反対側の隣は、ポールとアンドレ・リチャーズだ。

いつまでたつても現れないミロに、内心やきもきしていたカミュは、突然襟元に滑り込んで来た冷たい手にうわつ、と小さくひっくり返つた声を上げた。

「三カミュ！」

声と同時に、頭上に重みを感じ、カミュは自分の視界に金色の巻き毛がちらついていることに気付いた。

「ミロ?! 今まで何処に——」

「あ、ちよつと練習してきた。ごめん、待つてくれたの？」

思わず弾みそうになつた声を無理矢理普通のレベルに抑さえて顔を上げてみれば、後ろからカミュを抱き抱えるように両腕を首周りに回して、上からカミュの顔を覗き込んでいるミロの

顔があつた。両脇と前に座る友人達の口がOの字に開き、そのまま固まつている。カミュは咄嗟に何か言わなければと思つたが、首筋に触るミロの腕のひんやりした感触に一気に拍を早めた鼓動と、自分達を取り巻く五組十本の好意的でない視線とのギャップに妥協点を探しかね、反応が一步遅れた。

とその間に、ミロが更なる爆弾発言をした。

「あのさ、カミュ、——俺にキスされるの、嫌？」

決して小さくはなかつたその声は、カミュの座っていたテーブルは勿論、隣のテーブルにまでしつかり聞こえてしまった。ざわついていた空気がカミュのテーブルを中心にしんと静まり返り、その異様に更に隣のテーブルからも会話が消え、ひそひそと、何があつたのだ、と囁き交わす声が食堂に満ちた。

こんなところで、なんということを聞いてくれるのだ……！カミュは叫び出したい衝動に駆られたが、それを無理矢理に腹の底にねじ込み、口元には淡い笑みを浮かべた。動揺を隠すには笑顔が一番だ、と知つてはいたが、それはあまり成功はしなかつた。

「それは——ちよつと、困る、……かな？」

頼むから、これで全てを判断してくれるな、と願いを混めて、ミロの瞳を見上げる。ミロの瞳が、がっかりしたような、困つたような色に塗りつぶされた。

「……かな、じゃねえ！」

途端に、隣に座っていたアイオリアが凶暴な唸りを上げて、ミロをカミュから引き剥がした。そして、立ち上がりつてミロの

方へ向き直ると、びしっと人差し指をミロの鼻の頭に突きつけ、言い放つた。

「聞」えただろうが!! カミュは嫌がつてるんだ、お前もいい加減アホなことは止めろ！」

「俺はカミュに聞いてるんだ！ リアの意見は聞いてないし、お前に何か言われる筋合いはない！」

「どつちにしてもだ、お前はとにかくカミュに近づくな！」

「嫌だ、そんなのリアに言われる事じゃない！ 俺の行動を決められるのはカミュだけだ！」

「おい、落ち着けよ、二人共……」

ウォルトがげつそりと溜息をつき、お前も悪い、といわんばかりにカミュを横目で睨んだ。カミュは何も言えず、小さくなつていたが、その気持ちはアンソニーがとても同情的に解釈して代弁してくれた。

「……そりや、こんな大勢の前であんなことを聞かれたら、困る、としか言えないよね……思ひ切り振つたらいくらミロでも可哀相だよ」

その夜、カミュはアイオリアが熟睡したのを確かめてから、一通の手紙を書いた。

「親愛なるミロへ。」

君の姿を見る度に、もどかしい反応しか返せない僕をどうか許して欲しい。不運が重なって、僕等の関係はミスター・ペネツ

トに知られるところとなつてしまつた——ベネット氏は、本気で君を別の寮に転寮させる道も考えている。僕は、どうしても、今君と離れたくないんだ。

君は気付いていなかっただろうけれど、僕はこの学校に入つた時から、ずっと君のことが好きだつた。君はサガ先輩に夢中で、僕には到底望みはなかつたけれど、それでもずっと君の事を思い切れなかつた。今でも、こうして、君が僕の気持ちに伝えてくれたことが信じられない……もう、決して手に入らないものだと諦めていたから。だから、君が周囲の軋轢をものともせず、僕に好意を見せてくれることが嬉しくてたまらない反面、それを冷たくはねつけざるを得ない今の状況が辛い。

君は、僕に、キスされるのは嫌か、と聞いたね。あの場では、僕はああ答へざるを得なかつた——さもなくば、君と僕の関係は明らかになり、君は他の寮に送られてしまうかも知れない、と思つたから。でも、本当は、今すぐにもキスしたい。今もし君の部屋にポールが居なかつたら、あるいは僕の部屋にリアがいなかつたら……僕はきつと、君と朝まででもキスしているだろう。

ミロ、周囲に人が居るときに僕が見せる君への態度は、全て仮面だ。本当の僕は、昨日、ロバートホールで君が見た通りだ。君がそういう態度の使い分けを好まないことは、良く知つている……でも、僕等はまた学生で、寮生である以上、この学校の規則に添わなくてはならない。ミスター・ベネットに論戦を挑んだ君の主張は正しいと思うし、その姿勢は潔いと思うけれど、

その結果僕等に幾重にも監視の目がついてしまうのは、僕はなんとしても避けたいんだ。それは、僕等の僅かな自由も奪つてしまふに違いないから。

だから、どうか、あまり周囲を刺激しない方法で僕にコンタクトをとつて欲しい。君も知つている通り、僕等の友人達でさえ、僕等の関係に好意的とは言ひ難いんだ。君のことが一番大切なのは勿論だけれど、僕はそのために僕等の友人を失望させたり、傷つけたりすべきではないと思う。特にアンソニーは、サガ先輩の件で過去にひどくショックを受けている……彼等にも、自分、僕等のことは話さない方がいいだろう。

僕も、二人だけで逢える機会を探すよ。本当は、こうして離れているのがとても苦しいんだ。一日二十四時間、ずっと君の側に居られたら、どんなに幸せだろう……離れていると、余計に君のことばかり考えてしまう。今も、ロバートホールで君が抱き締めてくれた腕の感触を覚えている。あんなに幸せな時間は、十七年生きて来て初めてだったよ。

せめて、君が安らかに眠れますように。僕は自分、とても落ちて置いて眠れそうにないから。

心から、君のことを愛しているよ。

カミュ・R・バロウ

最後の一行を書き付けた時には、カミュの心拍数は二百に近い数字まで跳ね上がっていたが、カミュはそれを書き直すこと

はず、そのまま封筒に入れ、嚴重に封をした。

態度で、声で、本当の事が言えないのなら、せめて手紙では素直であるべきだと思つたからだ。

しかし、これをそのまま手渡したのでは、あまりに目立つてしまう。友人達はもしかしたらミロのカミュに対する態度を改めてくれるように頼んだ手紙だと受け取るかも知れないが、その他大多数はそうではないだろう、とカミュは思った。今日のアイオリアの剣幕を見れば、今後もそう二人で話せる機会があるとは思えない。せめて手紙くらいはそれなりの頻度で渡したいが、どうすれば良いか。

そこで、カミュは思い出したのだ。自分達が一ヶ月前までやり取りしていた、数学のノートのことを。

ノートを貸す、という名目で、そのノートに手紙を挟んで渡せば良いのだ。そう気付いて、カミュは慌てて時間割を見直した。

数学は殆ど毎日あり、しかも最近ミロは三回に一回の割合で講義を休んでいる。明日の月曜は多分出て来るだろうが、翌日の火曜はアンサンブルのクラスが重なつていて多分出てこない。つまり、火曜の夜にはこの手紙を渡せる、ということだ。

逆に言えば、それまでは、ミロに寂しい思いをさせることになるだろう。カミュは溜息をつき、一向に眠くならない頭を振つてスタンドの灯りを消し、ベッドに潜り込んだ。

時間が過ぎるのが、とても遅く感じる。こんなことならば、やはりあのときロバートホールで、ウォルトには先に帰つても

らつて、もつとゆつくりミロと話せばよかった。何度も思い起こした記憶は、カミュに未だ癒えぬ胸の痛みと、思いがけずその手に残つた幸せを呼び起こす……その記憶の密度は濃いけれど、それはあまりにも短い時間であつたように感じられた。

あと四十八時間。それが過ぎるまでは、どうしようもない。カミュは諦めて、臉を下ろした。茨の道であることは、最初から分かつていたことだ。——それに、長く待てばそれだけ、通じたときの喜びも大きいに違いないのだから。

カミュ・パロウとミロ・フェアファックスの「文通」は、こうして始まつた。彼等の関係がスタンダードには遙か遠いことも、恋人の規格外具合はその更に彼方にあることもカミュ・パロウは承知していたが、皮肉にも、若い恋愛に周囲の監視が及ぶところや、それを破る方法が畫簡しかないという点に於いて彼等は全く古典的であつた。

以下、カミュの一通目の手紙へのミロの返信。

「Carissimo Camus,

手紙、ありがとう。正直、色んな事に戸惑つてる。カミュに手紙を書くのは嬉しいけれど、酷い違和感を感じる。一文字書く間に頭の中では百くらい言葉が走つてるんだ。すぐそこにカミュが居るのに、どうして手紙なんか書かなきゃいけないんだろう？ その手数がイヤだ。リアは絶対に部屋に来るなと言

張るし、オケでだつてウオルトやマックス、アンソニーまでカミュの側にべつたりでちゃんと話せない。なんであいつらがある事するんだつて、結構本気でムツとする。凄く、苛々することばかりだ。

専科の奴らなんて何にも言わないし、教官だつて別に干渉してきたりしないぜ？面白がつて笑つてるか、次の試験では恋愛が反映されるものを期待するつて、プレッシャーを掛けられるぐらいだ。そう、寧ろ結果を要求されてる。本当にカミュの事が好きなら、それなりの結果をだせつて。そういうもんだろ？まだ始まつても居ないのに、ただ「禁止」の一言を言うんじゃない、それで俺の授業への態度や結果が駄目だつたら注意すればいいし、でも、それで成績が下がつたつて、それは俺の問題で先生やリア達の問題じゃない。みんな、おかしだよ。なんで一番プライベートな事によつてたかつて首を突つ込んで、それが当たり前つて顔をしてるんだ？カミュは俺がカミュの事を好きになつたからつて、絶対に勉強の手は抜かないし、俺だつてゴミ箱に直行するような（これ、エヴァンス教官の口癖）音楽弾く気は無い。

ああ、ごめん。こんな事カミュに言つてもしょうがない。とにかく、俺がカミュを好きなことは変わらないし、誰にも変えられない。

周囲を刺激しない方法でカミュと接するつて、どうするの？俺がカミュを好きだつて言つたのを取り消せて事？

正直、それは、いくらカミュの希望でもイヤだ……。自分の

言つた事は嘘じゃないし、それを取り消して嘘をつくのもイヤだ。違ふ寮に飛ばされたいようには、氣を付けるよ……。寮の中でキスしなければいいんだよね？朝食や夕食は？別々のテーブルに座つて欲しい？俺が一緒だと困る？オケの行き返りで二人で話せないのかな？ちゃんと頼んでみても駄目なんだらうか？数学の授業、隣に座るのは？それも困る？カミュが困る事を教えてくれれば、それはしないように努力するよ。それから、困らせてごめん。

追伸…まさかまたカミュ、何かあること無いこと言われて困つている？もしカミュの周りがどうしようもない奴等ばかりだつたら、カミュはストリートで、俺がゲイだつて事でいいよ。ストリートなのに言い寄られて困つていうのでカミュの周りが納得するなら、それも一つの手だと思う。それでカミュが少しでも悩む事が減るなら、それが最善だと思う。とにかく、カミュが辛い思いをしなければ、それが一番いい。一番カミュが楽な道を選んでよ。俺はそれでいい。

近いうちにちゃんと二人で話せるといいんだけど……
Baconi!

そして、それに対するカミュの返信。

「親愛なるミロへ。」

君が焦れているのはわかる……。でも、僕等がこの関係を大つ

ぴらにできないのは、僕等以外のところに理由がある。集団生活をしていて、しかも僕等は下級生の模範となるべき六年生で……僕等は僕等だけの都合では動けない。それに、僕自身、浮かれすぎてると分かつているから、ある程度の制約はあつた方がいいのかもしれないと思つているんだ。勿論、一週間にただの一度も二人で話せないのはとても辛いから、どこかで二人で会う方法を探さなくてはならないけど……。

ミロにされて困ることなんて本当はないけど、周囲を刺激しない、という意味では、やつぱりキスはまずいかな。それ以外は、そんなに問題にはならないと思つけど……ミロが一緒に困ることなんて何もないし、無理に避けないで他の友達にするように普通にしていればいいと思う。

噂、は立つてるかもしれないけど、僕だつてもうあの頃みたいな言われつぱなしの下級生じゃないし、それは気にしないよ。とにかく、僕は君が他の寮に転寮させられるのを避けたいだけだ。満足に話も出来ないのに、この上姿も見られなくなつたらたまらないから。

それじゃ——お休み。よい夢を。心を込めて。

追伸、

Bacioni、というのはイタリア語に聞こえるけれど、どういふ意味？」

カミュは、これを数学のノートに挟んで渡した後で（勿論友

人達の監視の中でだが）、ミロと一人きりで会うともいいたくない所を思いついた。けれど、それを伝えられるのは、おそらく次の火曜日、またミロのアンサンブルの授業が数字に重なつた後のことだ。

カミュはそれまで待つ事を大変もどかしく感じたので、今度は社会学のノートに手紙を挟んで渡すことにした。アイオリアは「社会学のノートって何書くんだ？」と訝しんだが、幸いアイオリアもウォルトもアンソニーもこのクラスを受講していなかったたので、カミュはそれ以上の追求から逃れることが出来た。

「ミロ、

二人で会えるとても良い場所を思いついたよ！

ロバートホールの君の練習室へ訪ねていくのはどうだろうか？ あらかじめ君の部屋が分かつていけば、僕の練習時間中に抜け出して君に逢いに行くよ。流石に皆も、僕の練習が終わるまでドアの外ではりついていないとは思えないから。

それでよかつたら、普段昼休みに君が練習している部屋を教えてくださいませんか？

もつとも、そう長く君の練習の邪魔は出来ないから、精々十五分程度だけ……

……早く、二人で会いたいな。 C.B.」

そしてその返事。

「びっくりしたあ！ まだ返事渡してないのにまた手紙が来た!! そつか、音楽棟に居る時間で重なる時間帯があつたんだ！ 屋の最後のコマで使っている部屋は、大抵ホールの尻尾の部分の袋小路になっている部屋。確か、番号は二三三号室。いっその事ここで一緒にお昼食食べればいいのに。朝食くすねて持つてくるとか。

Anche io...mi fa piacere stare con te.]

「Mi manchi, Carissimo Camus,

数学のノートありがとう！ 大事に見てるよ。

リアやウォルトの事、カミュの言ってる事、正直頭によく入ってこない。やっぱり俺には納得出来ないよ。あいつ等が首を突っ込んでくるの。

キスは、唇にするキスじゃなくても困るって事？ 普通の友だちにする事……をカミュに平気でする方が難しい気がする。なんか、物凄く緊張したり嬉しくてどうしようもない気分になるから……。リアたちとぶざけてる方がよっぽど簡単にボディタッチしてるのに、あいつらそれ分ってんのかな！ でも、普通だんな。うん。普通になるように努力する。でも、顔が笑つちゃうんだよなあ……。

噂、やっぱりあるんだ……。それだけは、本当にごめん。でもさ、そういう噂が立つつてのは、結局カミュにそれだけ魅力があるって事で——って言つてもあんまり慰めにはならないか……。でもさ、カミュが人から好かれるって言うのは、凄いい

とだよ。ポールだつてそうだし、リアやウォルトだつて、結局はみんなカミュに惹かれてるんだ。自信もつていいよ。ジョシュアもなんだかんだ言つてカミュのこと意識してるしな。

カミュもちゃんと寝て、ご飯食べてな。

Ti vogli tanto bene.

追伸：

答え。bacio = kiss bacione = a big kiss.]

二通まとめて返された返信には、どちらにも分からない一文がついてきて、カミュは苦笑した。カミュはラテン語の成績は良かったので、ラテン語にそこそこ近いイタリア語の推測は不可能ではなかったが、その度に図書室へ行き、手紙を見られないようびくびくしながら調べものをするのも何だか虚しい。

同級生の仲間達は、ミロには恥ずかしいという概念そのものがないのだと信じて疑わないが（そして事実、ごく普通の少年達が恥ずかしいような事に関してミロのセンサーは皆無に等しい）、実はもつとも深い心の部分では相当に照れ屋であつて、それはミロのヴァイオリンによく現れている。カミュはミロがこれらの結語をイタリア語で書く意図を正確に理解していたが、相手に伝わらない言語に逃げるのは少し狡い、とも思った。それなので、数学の授業の合間に教授とクラスメート達の間を盗みつつ、ノートを一枚破つて返事を走り書きした。

「音楽室の件、了解。それじゃ、毎週水曜日がレッスンの日だから、その前に行くよ。昼はリア達と一緒にいるだろうから……レッスンがあるからその前に練習する、と言えば抜け出せると思う。」

それから、イタリア語の一文は理解しなくていいの？ ちゃんと英語で書いてくれないと分からないよ（フランス語でもいいけどね）。

言葉も音楽も、伝わらなければ自満足で終わってしまった意味がないだろう？（笑）

「僕の大切な友へ。 C.B.」

さて、この事務的なメモをミロがどう受け取るか。カミュは、ミロのちよつと困つたような表情を想像して口元が緩むのを抑えながら、ウォルトと共に楽器の練習がてら、和声の授業を受けていたミロにノートを渡しに行つた。ミロは課題でつまづいたのか、授業の後も最後まで教室に残つて五線紙を睨みつけていた。

「どうだ？ 調子は。なんか難しい顔して考え込んでたが」

ウォルトがミロの座る机に寄りかかつてそう切り出すと、ミロは漸く顔を上げて、眉間に皺を寄せたまま言った。

「……気に入らない……つてか、平達の外声完全五度はダメとかいうくせに、ドミナント九の和音の根音省略第一転回形だけは例外とか、訊わかんないよ」

「何？ バス課題？」

カミュはミロの手元の五線紙を覗き込み、二十秒ほどじつと考え込んだ。去年音楽科の試験を受ける際に、カミュもまた和声の勉強も一通りこなしており、和声はカミュの得意な科目の一つだったのだ。

「……これは、開離で始めるとあまり良くないんじゃないかな。密集で始めて、ここのテンション・コードはやめて、ただのドミナント第一転回に変更。次のトリックで開離、そうすると三小節目の六、四の進行が綺麗に開けてソプラノが綺麗に聞こえるよ。テンションコードは、そのあとの六小節目までとつておいた方が、ドラマチックになる。——まあ、あまり面白い和声展開じゃないかもしれないけど」

「うわ……早っ！ 見ただけでそんな分かるんだ……俺なんか未だに公理集見ながらやつても禁則やらかして点引かれるのに」

カミュはミロの惜しめない諷刺に嬉しくなり、ミロの役に立てたことを密かに喜んだ。

「まあ、聖歌隊に居た時間が長いからね。あまり公理を頭で反芻しなくても大体禁じ手は分かるんだ。あとは、例外をうまく使つて、もう少し洒落た和音を沢山使えればそれに越したことはないけど」

「……カミュはそれだけ出来りゃ十分だろ……」

ミロは溜息をつき、そういえば、何か用事？ と二人の級友を見上げた。

「用も何も、カミュがお前のところに来る理由つていつたら一

つだろう？ コイツ、お前が欠席した授業はいつも二人分ノートとってるんだぜ？ お前にノート貸してちゃ、自分の課題が出来ないからな」

ウォルトは呆れたようにカミュを臍腹をこづき、もうお前の世話焼き癖は病気だ、とぼやいた。

「いや、そんな大した手間じゃないから。二度書けば復習にもなるし……数学、今日レポート課題が出たよ。締め切りは来週の火曜日だ」

ミロはじつとカミュを見上げ、カミュの手渡したノートを受け取って、そのままその手を插んだ。

「……俺の分まで、ノートとつてくれてるんだ。ありがと」

ウォルトは、一瞬、ミロの瞳に浮かんだ熱っぽい潤みに違和感を感じた。こいつ、熱でもあるんじゃないのか？ そう気付いて一歩近寄り、口を開いた。

「おい——」

しかし、その言葉の続きはそのまま途切れ、ウォルトは文字通りその場に硬直した。

ミロが、手にとったカミュの指に、唇を押し付けたからだ。それは、恭しく礼儀正しい挨拶のようにも見え、そこだけが数百年の時代を越つたかのようにだった。しかし、ここは二十世紀も終わりに近づこうとするイギリスのボーディングスクールの中だ。ウォルトはそのことを頭の中で反芻して、一瞬この空気を受け入れてしまいうようになった自分を激しく叱咤した。

違っだろう、それは!!

ウォルトが言葉失って硬直している間、カミュもまた、咄嗟に、何も返せなかった。熱いミロの唇の感触を中指に感じた瞬間に、心臓の鼓動が二倍に跳ね上がり、頬に熱を感じていたからだ。

何か言わなくては、とカミュは焦り、咄嗟にミロが添えていた手を外して、その手をそのままミロの頭上に置いた。「でも、本当に最低限のことしか書いてないから。あとは、自分で頑張れよ」

少しがっかりしたようなミロの表情を見下ろして、カミュは微笑した。それは、この場の気まずさを隠すことを意図した微笑だったが、ウォルトにはまったく別のものに映った。

「おいおいおいおい……!!」そこは、そんな風に笑うところじゃないだろう?!

この柔らかな、全てを包み込むような微笑には、覚えがある。ウォルトは二年前を思い出した。ダンス大会の時だ。ミロの身代わりにダンス大会の女性パート代表を引き受けたカミュの衣装を、ウォルトがポールと共に制作したのだ。

あのときカミュが見せた覚悟と、その淡い微笑を、ウォルトは今でも鮮明に記憶していた。いつもより柔らかい表情と、透徹したまなざしが、息を飲むほど美しく——まだ異性への憧れも知らなかつたウォルトの血液の温度を上げ、その記憶はその後何週間も胸の奥に留まり続けた。

あのときも、驚いたのだ。普段、凛々しい、という表現がもつともしつくりくるカミュ・パーロウの中に内在していたもう一

つの性、それが、普段はカミュ本人の表情や行動によって隠されていただけであつて、誰も気が付かないまま常にそこにあつたのだ、ということに。

それが、十四歳というまだ少年の域を抜け切らぬ年齢の為だと、何の疑問もなく己を納得させていたウォルトは、このとき唐突に、その過ちを悟つた。

カミュは、そう言えば、あの頃からあまり変わつていない。

この二年で、他の友人達は皆印象が激変した。けれど、最初から大人びていたカミュは、変声を迎えた後もそれまでのカミュのままだった。高い声は出なくなり、普段喋る声も低くはなつたが、それは昔の声の延長線上にあるものだ。体は相変わらず細く、すらつとした印象で、髭も体毛も薄い。

……これは、もしかすると、かなりヤバいんじゃないか？

ウォルトは、今見たカミュの表情に身震いを覚えた。それは、ウォルトの目から見ても、多少変な気を起こしてしまふそうなくらい、美しく艶やかだったのだ。あんな笑顔を向けられたら、カミュに執着しているミロが勘違いを起こすのも無理はない。ただ、世話焼きが高じてあんな慈母のような微笑を向けるのなら、あまりに酷というものだ。

「カミュ、……お前、もうミロにあまり近づくな。お前、あいつに結構酷いことをしてるつて自覚あるか？」

講義室を出て、溜息をついてそう吐き出したウォルトに、カミュは「えっ？」と意味が分からない旨を短く表明し、ウォルトは益々カミュをミロから遠ざける決意を固くしたのだった。

「カミュへ

ごめん。逃げてた。

……でも、全部逃げてたわけじゃないんだ。

その、こういう事を伝えるのに、英語って使つた事ないんだ。カミュの事、凄く好きだ。心から好きだ。

上手く言えないけど、自分のそういう気持ちや人に伝える時、英語を話す人にそういう対象が今まで居なかったから、イタリア語でしかやつた事無くて、その方が自然で、英語に直して言うのって、なんか「嘘」ぼくて……。

でも、これが言い訳だつてもよく分かつてる。ごめん。

『言葉も音楽も、伝わらなければ自己満足で終わつてしまつて意味がない』

その通りだと思つ。ちゃんとする。頑張るよ。

やつぱり手紙はもどかしいな……。

早くカミュに直接会いたいよ。

カミュの事抱きしめて、キスがしたい。

楽器弾いてない時はそういう事ばかり考えるよ。

どうしたらいいんだろう。

M.F.」

こうして、友人達の監視の目は益々厳しくなり、ミロとカミュの恋愛はより深く水面下に隠された。もつとも、そこに神経を

割っていたのは主にカミュの方で、ミロはといえば如何にしてカミュに自分の覚悟を見せるかにひとかたならぬ努力を割っており、そのヴァリエーションの広さはミロをカミュに近づけまゝとする面々の呆れを通り越して苦笑を誘うほどだった。

食事時は隣の席でなくとも必ずカミュの元へ立ち寄り、背後から軽くハグをして去って行く。授業は必ず隣の席に座り、何故かピツタリと腕や腰が触れる距離でくっついている（このような近距離はラテンの国では珍しくもないが、イギリスでは通常嫌がられる）。廊下ですれ違う時も、必ず側まで寄つて来て、肩に手を回して機嫌を尋ねる。カミュが周囲の視線に気付いて、不自然でない距離をとろうと身を引いても、全く怯むことなく距離を縮めてくる。

ミロがカミュに起き抜けのキスをした日曜から二週間も立たぬうちに、ミロ・フェアファックスに迫られて困っているカミュ・パロウの図は全校でもっともホットな話題となつていた。男ばかりで刺激の少ない学園生活で、この手の話題がもたらす娯楽の効果は計り知れない。噂は既に卒業生にまで広がり、誰もがこの求愛劇の結末の予想に夢中になつた。

カミュ・パロウがいつキレルか、逃げるか、それとも、折れるのか、あるいは、教授達が見かねてミロを追放するか。

こういつた一連の騒動を、友人として複雑な思いで眺めていたアンソニー・スミスは、その日、我が身に待ち受ける運命も知らず、いつものオーケストラの練習場所であるロバート・ホルの八角堂に向かつていた。

八角堂には、防音のため二重の扉がある。一つ目の内扉を開いた直後、アンソニーは突如鳴つたカウベルの騒音に、文字通り半インチほど飛び上がった。扉の内側を見れば、何故かドアのノブの部分にパークッションパートが所持するカウベルが三つもぶら下げてあり、如何にも中の人間の侵入者の存在を知らせる仕掛けのように見えた。そこで、よからぬ企みの存在に感づき、踵を返していれば面倒には巻き込まれなかつたことだろう。しかし、臆病なくせに好奇心の人一倍強いヴィオラパートの気質を余す事なく受け継いだアンソニーは、その内側の扉を押し開けて中を覗きたい衝動に抗うことができなかった。

かくして、そつと内扉を押し開けると、がらんとした八角堂の中に何故か異様に人口の密集した地帯があり、その全員が固唾をのんでアンソニーの方を見つめていた。

「なんだ、お前かよ……アンソニー」

「ここ数ヶ月耳にしなかつた懐かしい声が、アンソニーの耳を打つた。」

「……デス先輩？ それにアンドリユー先輩も……どうしてここに……」

デス、ことデジー・ギネスも、アンドリユー・シーファも、去年卒業したスミス寮の卒業生だ。アンソニーとしては、こんな時期に、わざわざこんな田舎のクイーンズベリにやつて来た理由を訊ねたつもりだったが、デスは危険は去つたとばかりに、きつぱりその質問を無視した。

「そら、全員張つてけよ！ 一口五ポンド！ 管楽器と低弦は

必修だと、お前等の先輩のアイオロスから託かってんだ。おいおい、そんなちまい小銭で払うな！」

「デス、そんな下級生から巻き上げるなんて可哀相だよ……」
アンドリユーが一応とりなす口を挟んだが、デスは断固取り立ての手を緩めなかった。

「お前、人聞き悪いぞ。巻き上げてんじゃねえ、掛けに勝ちや平等に分け前に預かれるんだ」

八角堂の舞台袖に置かれた講演台に群がる人だかりは、まぎれも無く交響楽団の既に一線を退いた最上級生と同級生の面々が、厳格な元コンサート・マスターのムウ・アリソンは居ないが、元団長のジャック・ホワイトウッド、元管セクシヨンリーダーのダン・ウォルターの長身も見える。若干、スミス寮のオーケストラ以外の人間も混じっているようだ。

「おい、アンソニー、お前も張ってけよ！」

水飲み場に群がる水牛の群れのような人山からひよい、と顔を上げて、マックスが手を振った。

「すげーよ、OBの張りが滅茶苦茶熱いぜ！ ロス先輩なんか一人で五百ポンドも張ってるんだ。こりや当てたらでかいぞ！」
「張ってけ、って……なんの掛けだよ、一体……！」

ああ、どうして僕はこう聞きたくもないことを聞いてしまうんだろう。アンソニーはワイオラ属に蔓延る病のような弱気を呪いながら、それでもするするとその邪な引力に引きずられて、講演台に近づいていった。と、その肩をがっしりと背後から掴む腕があった。

「よう、なんか、面白い賭けやってんだって？」

「ハウ！……にパーマーまで?！」

「なんかさ、スミス寮全員、金稼ぎたい奴はここに来いって言われてさ。アレ、カミュがミロのアタックに何時落ちるか、つて掛けだろ?」

「えええつ?！」

アンソニーは声をひつくり返らせ、咳き込みながら反論した。
「カミュがいつ落ちるか……君等も、そうさせないようにカミュのガードしてるんじゃないのかい?！」

「それはそれ、これはこれ」

パーマーが厳肅にそう唱えて、それからにんまりと笑った。

「いやさ、ウォルトやリアは目くじら立ててるけど、あんまカミュの奴嫌がつてる感じじゃないだろ? まあ俺等もさ、本人同士が納得済みならいいんじゃないの、つて感じだからさ」

「そうさ。もしあいつらが本気で惚れてるなら、周りがわいわい言うのも野暮つてもんじゃないか? いいじゃん、好きなようにさせてやれば。でも、俺が張る日まではダメだけども！」
ハウもからからと笑い、「すんません、お邪魔しま〜す」と水牛の群れに加わった。

「げ、もう殆ど空いてる日ないじゃんよ」

「ホントだ、えーと、空いてるのは……うーん、五月か……」

「ソレ結構厳しいな……カミュの奴、結構すぐに落ちそうだよな。あ、マックスはどこにした?」

「それがさ、めばしいところはみんなもうOBにとられてさ。」

俺も五月上旬。やつぱり、どうせなら掛け金独り占めしたいしな。考えようによつちや、俺達はある程度結果をコントロール出来る立場だしさ。」

アンソニーは、水牛の群れまで残り二十フィートの距離から動けず、同級生の無責任な会話を呆然と立ち尽くしていた。

結果をコントロール出来る、って、それはつまり、自分が張つた日まではとことん二人の邪魔をする、ってことかい?!

いや、カミュが本当は困つてるなら、勿論それでいいんだけど……

「うわ、ウォルトの奴も張つてるじゃんか!」
「うそマジ? どじこ!」

「落ちない、に張つてる。あいつ、最後まで邪魔するつもりだな」「じゃ管セクリーダー様のご公認?! なら大手振つて賭けられるじゃん! デス先輩、これ一人勝ちの場合今幾らつすか?」

「そりゃなあ、軽く五千ポンドは超えるぜ」
「すげえ!!!」

最早、群れる水牛の群れに良心の欠片もなく、狭い講演台は小銭がかち合う音と意味不明の笑いや雄叫びで溢れた。アンソニーはその講演台に立ち上るとす黒い空気に怖れをなし、足音を隠ばせてそいつとその場を離れようとした。とその時、分厚い手の平が、がつしりとアンソニーの肩を抑えた。

「だから、お前も張つてけ、つて」
「……デス先輩……」

心に滝の涙を流しながら、アンソニーは振り向いた。

「なんでクイーンズベリに居るんですか……アンドリュウ先輩も……まさかこのために?」

「アホか。いくら俺でもそこまで暇じゃねえよ。俺はジュディ寮の計測の準備。王立心霊研究所に提出するゴーストスポット候補地のレポートを書くんだ。コイツは、なんでもヘッドマスタ―と話がしたいんだと」

「話がしたいわけじゃなくて、正式なインタビューだよ……うちの校長は、オックスフォードの卒業生で、経済学では結構有名な学者なんだよ」

「お前が経済学つて、ホント信じらんねえよな! 将来何になるつもりなんだ?」

「え、僕は、無難に、公務員になればいいなと思つてるよ」
「うわつ、地味! 本気かよ?」

「あの、デス先輩、僕、ホントにお金ないんで、辞退します」
アンソニーは、自分からデジー・ギネスの気が逸れたこの機に乗じて、そつとその場を離れようとした。が、デスはアンソニーの前にひよい、と足を差し伸ばし、そこにつつかかったアンソニーは転びかけてたたらを踏んだ。

「何するんですか……(涙)」
「とにかく全員から集めてこいつてロスの命令なんだ。なんでもいいからお前も張れ」

「そんな……!」
「金がないならこいつが出すから」

デスの左手の親指がくいつとアンドリュウを指差し、アンド

リユーはえつ、と両目を見開いた。

「なんで僕が……!」

「あ、ちなみにOBは一口五十ドルからだからな」

「そんな、僕はもう払ったじゃないか!」

「だから、これはお前の可愛い後輩の分」

「だったら、五ドルだろ?!」

「ちつ……アンドリユーのくせに知恵が回るな」

「僕は経済学部なんだつて!」

「ま、とにかくこいや、アンソニー」

がっしりと掴まれた肩をずるずると引きずられ、アンソニーは真つ黒に書き込みのされた一覽表の前に引つ張り出されて一枚の紙を目の前に突き出された。

よくよく見れば、一覽の中には一つ上の上級生や卒業したばかりのOBばかりでなく、五年上のコントラパスのトップ、ジョン・スチュアートや、ファゴットのフレリック・マコーマック、トロンボーンのプロバート・ワイズマン等の名前まで並んでいる。既に二月から四月までは全ての欄に複数名が張り込んでおり、イースター休暇などは欄に書き切れず隣にノートの切れ端を足して真つ黒に名前が書き込まれていた。デスもイースターに賭けているようだ。

「こんな……友達を掛けの対象にするなんて嫌だなあ……!」

最後の足掻きでそう呟いてみても、そんな幽かなウイオラ族の呟きが真剣に考慮されたことなどただの一度もなく、分かったから早く張れ、と小突かれてペンを持たされるばかりだ。

ペンの蓋を開けて、周囲に囁し立てられながら、尚も躊躇するアンソニーに、マックスが横から囁いた。

「そんなに選べないなら、オマエ目閉じて適当に指しちまえよ」

「えつ……でも……!」

「先輩の命令は絶対だぞ。なに、目瞑つて適当に差した、つて言えはあいつらだつて怒らねえよ」

本心にそうだろうかと、思いつつ、それでも具体的な日付を想像するのはやはり申し訳ないように思えて、アンソニーは仕方なくサインペンを握り直し、両目を閉じて大きく息を吸い込み、紙面に向けて突き立てた。

「ミロ、カミュ、ごめん……!」

ブスツ、と鈍い音がして、周囲で囁し立てていた声がしんと静まり返った。

「お前……! バカ、穴開けやがつて!」

デスが慌ててヨレヨレになった投書用紙をつまみ上げ、それから「ん?」とその穴の位置を覗き込む。

その表情が奇妙に歪んだので、アンソニーは恐る恐る尋ねた。

「あの……駄目ですか?」

「いや? ……良かったな、他に誰も張つてる奴いないぞ、こんなところ」

デスの口元は、への字に曲がっている。頬の筋肉がひくつき、眉毛がのたくる毛虫のように様々に角度を変ええる。

「そのペン、貸せ」

アンソニーがペンを手渡すと、デスは穴の空いた場所の横に、

アンソニーの名前を書き込み、それからぶはつ、と肺に詰め込んでいた息を一気に吐き出して爆笑した。

「け、傑作……！ こいつ、欄外差してやがる！」

「えっ?！」

マックスやハウ等がデスの置いた紙の上にかがみ込んで大声を上げた。

「ほんとだ！ 何、これって、例のキス事件の前つてことか?」「うわー、流石にそれはないよな！ カミユの奴、滅茶卓困つてたし!」

「えっ……そんな！ それ失敗!! やり直しするよ!」

「馬鹿野郎、男に二言はねえだろが！ お前は欄外で決まりだ。残念だったな!」

「そ、そんな……!」

アンソニーが悲鳴を上げて、デスのつまみ上げた一覽表を取り返そうと手を伸ばしたとき、再びカウベルがけたたましく鳴った。全員がぎよつと入り口を振り返つた直後、間髪入れずに内扉が開いた。

「誰だ? あんなどころにカウベルを括りつけたのは——」

扉の隙間から覗いたのは、見間違えようもない、第一一七代団長のカミュ・パロウの赤い髪だ。パーカッションの備品を勝手に持ち出されて、いつもよりやや厳しい顔つきをしている。今まさにデスの手から一覽表を奪い返したアンソニーは、その姿勢のまま石の彫刻と化した。カミュ・パロウと言えは、二代上のシユラ・コーツに比肩すると言われる博識かつ厳格な団

長として、既に団員の畏れと尊敬を一身に集めている。この手の中にあるものが、団長とコン・マスの窓の行方を占うものであり、練習の準備もほっぽつてそんな掛けに興じていたなどとは知れたら、この八角堂に恐怖のブリザードが吹き荒れることになるだろう。

もう駄目だ……僕が仕掛人じゃないのに!

ぎゅつと両目を瞑つたアンソニーの耳に、カミユの弾んだ声が届いた。

「デス先輩にアンドリユー先輩！ お久しぶりです！ 一体、どうしてクイーンズベリに?」

アンソニーにとつて幸運なことに、カミユは珍しい客人に對する追求を忘れた。アンソニーはすかさず手の中の紙をデスに押しやり、そのまま蝗のように飛び退つてマックスの背後に隠れた。

「よお、カミユ、お前が団長だつて? あの規格外れのコン・マスとは上手くやつてるか?」

デスはアンソニーから押し付けられた一覽表を慌てるふうもなく綺麗に四角に畳むと、胸元の内ポケットに押し込んでからカミユの方へと歩み寄つた。

「なに、ちよつとシユデイ寮の幽霊の調査でな。王立心霊研究所に提出する資料なんだ。ここは本物だつてシヤカの奴のお墨付きもあるし——あ、ミロも少し借りていいか? あいつが居ると、霊が出やすいんだ!」

「それは僕に聞かれても……というか、ミロは幽霊嫌いですから、首を縦には振らないと思いますよ。」

「なに、お前が一緒に来れば、あいつも喜んで来るだろう。」

そのデスの言葉に含まれた奇妙に甘い刺に、カミュは僅かに眉を蹙めた。

「……そんなことは、ないと思いますけど。」

「そうか？ 俺は、そんなこともあると思うがな。」

「仮にそうだとしても、僕と一緒に行ったら、出ませんよ。僕はどうも敢う体質らしくて、僕が隣に居ると、うちの兄も全く見ないようですから。」

カミュの兄、ジェームズ・バーロウは所謂心霊体質で、これまでに無害なものから相当危険ものまで一通りの心霊体験をこなしている。が、何故かカミュが隣に居る時は、これらの心霊現象が起らないのだ。

少し表情を固くしてそう返したカミュの肩に、デスはにんまりと笑って腕を回し、耳元に囁いた。

「成程、あいつがお前に執心なわけだ。お前の側にいれば、見なくて済むもんな。」

「……先輩？ 一体何を——」

「まあまあ。俺とお前の仲じゃねえか。本当のところを教えろよ。で、お前の方はどうなのよ？ ミロのアタックをのりりくらりと逃げ続けているって話だが？」

カミュは深く息を吐き、二級上への先輩への遠慮を捨てた眼差しをデスに突き刺した。

「そういう仲つてどういう仲ですか……とにかく、その手の話は、遠慮願います。どうせ何を言っても、尾鰭がついてとんでもない事になりますから。」

「ずれてるねえ……その年で、ま、もうすぐ春だし、どうだ、イースターあたりにミロと一緒にケンブリッジに遊びに来ないか？ 水仙や桜の花が綺麗だぞ？」

ひそめたつもりの声はすっかり周囲にも漏れ落ちて、団長の雷を怖れて縮こまつていた団員達は、一斉に「狡い！」と声無き叫びを上げた。

「親愛なるミロへ。」

なかなか逢いに行く時間がとれなくてごめん。君はずっと練習室で待っていてくれていたのだろうに……。

ここ暫く、交響楽団のホールの手配ですつと忙しかったんだ。一ヶ月で二十枚近くの書類を書いたよ。でも、お陰でなんとか今年は交響楽団の枠を増やしてもらえた。勿論、次の定期演奏会で君がソロをやる、というのもすっかりアピールさせてもらったよ。先生方は、音楽科で期待されている君がコンチェルトをやるということで、積極的に僕等の時間枠を増やす方向で議論してくれたんだ。サガ先輩の時だって、シユラ先輩はホールを確保するのに大分苦労したっていうのに、やっぱり専科の力って偉大な。

今度の水曜日は、必ず行くよ。……早く、誰の目も気にせず

に君に逢いたい。

毎日、本当の事を隠しているうちに、自分が誰なのか分からなくなってくるんだ。知らない誰かが、勝手に喋っているような気がして、そんな日の夜は、無性に自分自身を叩き壊してやりたくなる……。

多分、もう限界なんだと思う。だから、今度の水曜日、何があっても行くよ。

君を深く想う者より。」

ロバート・ホール一階の二三号室は、広さ四平米ほどの窓のない狭い防音室だ。ピアノのある部屋はピアノ科の学生が優先なので、弦楽器や管楽器奏者が練習に籠るには適さない。この部屋はすうらりと防音室が並ぶ一角の一番奥にあり、空き部屋を探す学生があまり中を確かめに来ないので、空調が壊れて比較的空いているので、ミロはよく練習に使っていた。

カミュから連絡のあった水曜日、ミロは管弦楽法の授業が終わるとすぐに教室を飛び出して、二三号室の空きを確かめた。すぐに鍵を借り、カミュが来るまでエチュードの練習でも、と楽譜を広げはしたが、ヴァイオリンを構えれば大抵のことは忘れてしまうミロでも、この日はカミュの面影を頭から追い払う事ができなかつた。

授業で隣に座るときも、廊下ですれ違う時も、カミュはいつも付き加減に視線を外し、微笑している。それが周囲に余計な詮索をさせない為だと分かっている、まっすぐにカミュの瞳

に見つめられる事がなくなってしまうことが、ミロには辛い。自分はカミュに何か不都合なことをしていないか、あるいは、カミュはもしかして、少し自分と距離を置きたく思い始めているのじゃないだろうか……。

相変わらず、熱のこもった手紙を送ってはくれるが、その熱が昼間のカミュの態度には全く見えない、そのことに、ミロは不安を抱き始めていた。

話したいことが、沢山ある。音楽科のメンバーで組んだピアノトリオのこと、そのうちのチェロ弾きが日本最良のマンガファンで、日本のマンガの話は沢山きいたこと、ニアソーリーの農場に、雌牛がきたこと……去年までは何時でも話せたことが、沢山話せないまま溜まっている。

気が散って集中できず、半分寝ているも弾けるようなエチュードで三度もつまづいた。音も気が抜けていて、全然迫力がない。ばかばかしくなつて、もう練習も止めてしまおうかとミロが楽譜を下ろしたとき、ちいさなノックが聞こえた。

はつとドアを振り返ると、廊下の向こうを振り返った赤い髪の毛の一房が見えた。

「カミュ！」

ミロは慌ててドアに駆け寄り、手に持ったヴァイオリンに気づき、それを急いでケースに横たえて、ドアのノブを捻った。廊下の向こうを気にしていたカミュが狭い防音室の中に飛び込んできて、ミロの両肩を掴み、ドアの窓から見えない死角にミロの体を押し込む。そして次の瞬間、ミロはカミュの